

Title	日本民謡選集, 霜田史光編
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.4 (1924. 11) ,p.156(626)- 157(627)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0157">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0157</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日病を得て遂に危篤に陥入り、特旨を以て位階陞叙の御沙汰を拜し、即日卒去せられた。享年八十有一（正五位勳三等）實に翁の如きを眞に立志傳中の人物と稱すべきである。

本書は行文平易にして、これを繙閱する時は、余の如き曾て翁の警咳に接せざる者も雖ども、自ら其の溫容の髣髴として目に在るが如く感せしめ、又よく敬慕の念を想起せしめる。猶本書には翁の日記、手控、備忘録、感想録、紀行、詠草等を多く引用して居るが、是れ等の日記類は數個の筐匣に充填するに云ふ事である。實に翁の健筆には驚嘆せざるを得無い。

令嗣剛吉郎君翁の偉徳を後世に傳へむが爲に本書を編纂せしめて弘く萬人に頒たる。又以て後進を誘掖啓發する所少なからざるものと信ずる。

最後に令嗣剛吉郎君に敬意を表し、且編者故須藤翠南氏、半井桃水氏の勞を謝して筆を擱く、ここにす。

(大正十三、九、十五夜 武田勝藏)

### 日本民謡選集 (霜田史光編 新詩壇社發行)

本書は外題の通り我國民謡中代表的と思はれるもの、一部を別離の情を歌つたもの、戀慕の情を歌つたもの、嗟嘆の情を歌つたもの、享樂的氣分を歌つたもの、人生觀を歌つたもの、生活に歌つたもの、自然を歌つたもの、親子の情を歌つたもの、希望を歌つたもの、雜、

に分類して収集したもので、終に各種民謡解説、註釋が附してあ

る。編者は其各種民謡解説中に次の如く説述して居る。

民謡は國民全體の聲であると同時に、國々の各局部的な地方色をよく出してゐる。それは交通不便な昔時に於ては、殊に明らかである。自然の影響はどんなに人々の感情を支配するものだらうか、民謡の始は自然の影響から來てゐることは疑ふ由もない、海岸に打ちつける怒濤の豪快にして悠長なる調べは、いつの間にか磯節となつて人の口にのぼる。又追分節の優婉にして哀調を帯びたる曲節は、北國の山々の曲線を思はせる。このやうに總ての節が何か知らその邊の自然の情景を思はせるのは、やがて人々が、如何によく自然と親しんだ生活を辿つて來たかといふことを示すものである。これは單に曲節の方面からのみ見たのであるが、その歌詞から見ても明かに前のやうなことは言へるのである。

さて民謡は貴重な郷土資料なる事は今更記すまでもない。其の民謡には其の國々の地方色がよくあらはされて居るもので、野趣横溢真情直露である爲に、まゝ卑俗な多少醜猥に近いものを聞くが、その歌詞歌調によつて其處の人情、風俗、習慣、傳説、環境等を知る事も出來、又時には類歌等の比較研究によつて其地と他地との交通の繁閑の程度をも知る事が出來得るのである。近來一方に民謡童謡の創作が流行すると共に、他方に郷土の民謡童謡の蒐集並に其研究も起り、最近には爐邊叢書中に熊野民謡集が上梓せられたが、民俗學の爲め慶すべきである。新唄流行の今日に一日も早く父祖の口遊んだ民謡を蒐集するのは目下の急務である。切に

郷土研究者の奮起を希望する。

猶本書は代表的のもの一部に過ぎ無いかから他日續篇を印行せられむ事を編者にお勧めする。

序ながら自分も亦民謡童謡には興味を持つ一人で、各地旅行の節にはそれを聞かせて貰つて居るが、實に其地の萬狀を語るものである。又昨年来郷土たる對馬の民謡童謡を蒐集して居り、既に一二雜誌に書いたこともあるが、異日餘暇を得たならば整理の上、上梓したいと思つて居る。

(大正十三、九、廿 武田勝藏)

### 大革命前の佛國

松本信廣  
國民圖書株式會社發行

『英文學史』をもつて名高いイポリト・アドルフ・テエヌは、わが國においては從來その名をきくのみにして、實際に彼の著作の紹介に接することがなかつたが、最近その『藝術論』は慶大教授廣瀬哲士氏によつて邦譯され、今また『現代佛國の淵源』の第一卷『大革命前の佛國』(舊制度)が松本信廣氏によつて邦譯された。テエヌは藝術批評家であることも歴史家であつて、個人に及ぼす環境の影響の偉大なることを強調したこゝによつて有名である。即ち個人は孤立したものでなく、その存在は多くの原因の結果であるから、あらゆる場合にまづ民族、環境、時代の三つが研究されねばならないといふのが彼の見地である。而して『現代佛國の淵源』は彼の晩年の作にして、彼の著作中最も傑出したものと言はれ、その目的は『現代フランスは一體何であるか』を説明せんとするのであつて、そのために『舊制度、大革命、新

制度の三状態の正確なる叙述を試みん」としたのである。而して本書は第一卷舊制度、第二卷大革命、第三卷現代政治の三部よりなり、今邦譯されたのは第一卷であつて、大革命前のフランス社會の叙述である。

第一編『社會の組織』においては、僧侶、貴族、及び王者の特權の起原、その性質、その功罪をのべてある。當時の特權階級は『公衆の代表者たらずして、君公の寵人たらんことを志し、羊の群を牧すべき責任を忘れ、反對に却つてその先を剪切した』のであり、また『統治の中心は百弊の中心』であつて、『凡ての不正慘害は、丁度疼痛、炎症の中心の如く此處より發出し、……此處に國家の膿瘍がその頭をもたげ決裂した』のであり、『最後の没落の來る前にフランスは既に崩壞して』をり、『その崩壞は特權階級がその公人としての性質を忘却し去つたためである』ことを論じてゐる。第二編『風習と特質』においては、當時の宮廷の誇耀的生活と貴族のサロン生活の浮華輕佻さをのべ、第三編『主義と精神』においては、革命的精神の組織、その要素たる科學的知識と古典的精神、第十八世紀の特色とする傳統を敵視し、歴史を無視する傾向をのべ、第四編『主義の傳播』においては、フランスに哲學の成功した所以を論じ、また第三階級の勃興と、それが新哲學を奉ずるに至つた経過をのべ、第五編『人民』においては、人民の窮乏とその原因、及び人民の知識状態を論じてゐる。當時の人民は『あたかもあまり強壯になつて人を蹴るのを恐れ、粗末な燕麥の食を少しづつしか與へられぬ駄獸の様に、また積荷に馴れて